

# 大塚恵美子の 議会報告



詳細は  
<http://otsuka.seikatsusha.net/>

12月議会から「一般質問」に「一問一答方式」が導入された。議会運営委員会で、一問一答の後の再質問、再々質問までという回数制限をなくすことも決定し、試行から現実的な判断が出た議会改革の一步となる。

## ●一般質問

### 災害応急における東京都との連携

都立中央公園の防災公園としての都との協定、連携を確認した。発災時の応急給水拠点(東村山浄水場、八坂給水所、美住給水所、運動公園給水槽)の周知、連携訓練の必要性やハザードマップを持ち出ししやすい携帯版に作り替える提案などを行った。

答弁は、都との連携協力の中で防災公園化(マンホールトイ)、かまこパン子設置などにも進めたいとのこと。

応急給水拠点については防災訓練で市民に周知、都との訓練も毎年実施とか。市民が給水に駆けつけられるようエリア区分が必要だが、早急に工事が始まることを確認できた。フイフライン確保の周知は浸透していないことが現状であり、周知の徹底は遠慮なくやってほしい。

## 放射能対策

市は公園82カ所の空間放射線量を測定しているが、9月から出水川の川底と1メートル地点も測定し高線量が公開されている。測定に至った理由と除染・除去などについて確認した。東村山では1メートル地点の測定値を除染基準に定めているが近隣自治体では地上の数値を除染の基準にしていることを指摘したが、改正の気配なし。

また、食料放射能測定器による市民持ち込み食料の測定を市民との協働体制で実施することの詳細と測定値の公開について聞いた。公開については当面は行わないとのこと。食料を測定し、知り、判断するための測定情報共有は有効だが、数値の一人歩きや農家・農協との理解の共有などに時間が必要とのことだ。

## 男女共同参画の実践

東村山市の女性職員の管理職登用に聞いて聞いた。政策決定への女性の参画が役所内から実践されるべきだが、当市の女性管理職は課長職1名であり、26人中最も少ないという衝撃的な数字

## 市民力に乾杯!

### 「福島の子どもたちととも」

「福島の子どもたちととも」東村山市民の会では、昨年11月、福島の子どもたちを支援する「2泊3日の保養を企画し、福島から7人のママ・2人のパパ・12人の子どもたちを東村山市にお迎えしました。今回の企画は、「子どもたちの保養」を目的としました。友達や親戚の家に遊びに行くように、いつでも気軽に過ごしてもらえたら...という願いからです。



## 2012秋を企画して



プログラムは、1日目:ウエルカムパーティー、2日目:完全フリー、3日目:外遊びというゆったりプランをベースに、施術師によるマッサージやベビーマッサージ講習、ハルーンアートや複数の市内保育施設スタッフによる親子遊びプログラム、エイサー演舞などが次々に組み込まれ、さらにお土産や絵本のプレゼントも多くの方による手作り料理&デザート&おやつとの差し入れが加わって、気が付くと総勢110名を超えるボランティア、11団体の賛同、50人以上のタイカーマスク(資金協力者)、3戸の貸家提供者による壮大な(?!)(東村山オリジナルプログラム)となりました。「原発事故をこのままでは終わらせない」「何かしたい!」という、切実な思いが込められた支えられ、第一回目の保養を無事終えることができました。子ども達も外で存分に遊んでいる様子を見つめるパパママの顔、今も忘れられません。この1歩を大切に、次へつなげたいと思います。ありがとうございました。

プロジェクトリーダー  
宇野木千尋

だ。

「第2次男女共同参画基本計画」には「市役所は全市内のモデルとして庁内の施策が男女共同参画社会実現の牽引車となる積極性が求められる」とある。まずは実態を聞くことから始め、ネットワークである子育て介護などの実情と仕事の両立、全庁体制を進めるワークライフバランス施策に工夫が必要だ。

答弁からは「育児休業復帰後の支援等の環境面と、人事評価の適正な運用等、人事制度面の両面からの取組が必

## 議会と市民がつながるには

「議会を知りたい市民の会」が開いた「市民と議員が語り合う会」に参加した。第1部は、参加者38人のうち5人の参加議員(伊藤真一、佐藤真和、島田久仁、福田かつこ、大塚恵美子)が「どうして議員になったか」を中心に自己紹介をし、その後「どのように市民の声を聴くか」「どのように一般質問を組み合わせるか」などの質問を戴く。情報収集や提案の仕方などお話をもらい、同僚議員の知られざるプロフィールも浮き彫りに。

2部は5~6人のグループで「東村山をどういうまちにしたいか、そのために議会の役割ってなんだろう」というテーマで意見交換をした。

私のグループでは、「このまちが、これで一番になるという目標をもとう、そのための具体性を」「この場に出て訴えられる人は中間層であり、手いっぱい出てこれない人に何が出来るか」「多様な市民グループがあるが繋がれない」など、この先の話をもっと、というところでタイムアウトに。

参加者は、審議会や検討会への参画、パブコメに応募する方など日常的に活動する方ばかり。問題意識もあかりで現状維持でよし、という方はおらず、大きな刺激を戴く。

まとめが必要とされているわけではなく、互いを知ること、ともにできることはなんだろう、という双方向での「初めの一歩」はあちこちで花開いたようだ。

「住んでいてよかったまち」をつくるには、議員だけのモノローグではなく、対立でもなく、やはりダイアログだ。

これからも有効な「対話」が継続できるといい。議会改革には市民参加が欠かせないが、具体的に描けなかったイメージを、この会はおもたしてくれた。

## 共に働くワーカーズ

### スーパントンのお掃除事業始まる

衣類のリフォーム、リメイク事業を設立して4年目となる2012年4月、新たに清掃部門を立ち上げスタートした。清掃を始めてみて実感したのは、石けん、重曹、クエン酸、アクリル束子を使ったお掃除は汚れ落ちも良く、何より素手で使っても混ぜても安心な原料なので、作業する私たちも使いやすい事この上なし。前年からの学習や実践で準備を進め、私たちのやり方で進めている。その特徴は汚れを貯めず、少しずつ日常的に掃除をすること。また障がいがあっても、高齢であってもそれぞれの得意な部分を活かして働くやり方。道具は使いやすいものを厳選するが、大きな機械は使わずに60代の私たちの扱える範囲のモノでおこなっている。メンバーは6名。内ハンディキャップは2名。すでに私たちも、やや高齢?と云うハンディを抱えるメンバーでもある。

和田安希代

仕事は生協の配送センターの清掃受託が主。午前中の2.5時間の清掃内容が、ほぼ変わらないやり方で出来る事で、障がい者であっても働きやすい仕事になるのではないかと思う。



ワックスがけの前に石けん水で洗う